

「喜べ、立て、お前を呼んでおられる」

マルコによる福音書 10 章 46 - 52 節

森島 牧人 牧師

今日与えられた聖書は、主イエスと盲人バルティマイの出会いの場面で、「盲人バルティマイをいやす」という小見出しが付いています。主イエスは弟子たちと共に色々なところへ出かけて、色々な人との出会いをされました。そして、その先々で主イエスの目に触れた人の上に、素晴らしいことが起こって行ったのです。

さて、今日の出来事は、主イエスがエルサレムに上って行かれる途上でのことです。エルサレム行を目前とするエリコの町、主イエスは、弟子たちや大勢の群衆と共に、十字架の出来事を待つエルサレムに向かって、その町を出ようとしておられるところでした。聖書には、「・・・バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、『ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください』と言いはじめた。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、『ダビデの子よ、わたしを憐れんでください』と叫び続けた。」(マルコ 10 : 46 - 48) とあります。主イエスは、その叫び声を耳にされて足を止め、彼の方を御覧になります。この時、主イエスの足を止めさせたもの、それは彼の叫び声の激しさともう一つ、「ダビデの子イエスよ」という主への呼びかけの言葉でした。この「ダビデの子」は、「救い主・メシア」を意味するものでした。彼は「ダビデの子イエスよ」と叫びながら、必死で信仰の告白をしていたのです。「イエスは立ち止まって、『あの男を呼んで来なさい』と言われた。」(同 10 : 49) と聖書は続きます。

主が呼んでおられると聞いて、「・・・盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。」(同 10 : 50) と、聖書記者はその様子を書いています。ここに「盲人は上着を脱ぎ捨て」という記述がありますが、当時盲人は薄いブルーの色の上着を着ることになっていました。施しを受けるための目印でもあったそのブルーの上着は、彼の一日一日の命を保障するもの、彼にとっての唯一の大切なものでした。すべてを諦め、自分で周囲に壁を造り、その上着を身に着けてその中に座っているという人生を生きて来た盲人の男が、主イエスの「来よ」とのお言葉を受けて、それまでの生きる術であった上着を一気に放り出し、躍り上がって主イエスのところへ来たのです。主イエスはそんな彼に敢えて「何をしてほしいのか」と問われます。彼の「目が見えるように」との答えに、主は即時に反応します。「あなたの信仰があなたを救った」と。この御言葉と共に彼は癒されたのでした。

この時の、主イエスの盲人の男への問い、これは、私たちへの主イエスの問いでもあります。「何を願うのか。どういう風に生きて行きたいのか」との問いは、「本当のものを見ているのか。わたしをメシアと信じているか」との問いであることを、私たちは知らなければなりません。

主イエスと出会うということは、単に主イエスを見るというのではなく、主と目を合わせるという出会いです。ルカ 24 : 32 に、エマオへの途上にあつた弟子二人が「主イエスが道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合う場面があります。私たちも主イエスと本当の出会いをし、主の問いに応答しながら共に歩んで行く時、私たちの生活の中に、人生に、素晴らしいことが起こって行くのです。